



音楽大学四年生の稲岡さん

さと不安でいっぱいでした。私のような小心者は大学へ入ったからとて、とても遊ぶ余裕などありませんでした。思った以上に厳しい授業に耐え、下宿にまっすぐ帰ってはピアノの練習しか

平和な世の中を

たけよし
近藤武美さん
(50歳 鮫島)

私が小学校へ入学したのは、ちょうど太平洋戦争が始まる前の昭和14年。物不足の時代で、食べ物や衣服なども、とても現在では考えられない程そまつなものでした。学校へ通うにはわらぞうりを履いたり、おべんとうにはサツマイモを食べたり…。

戦争が激しくなると勉強はほとんどできず、毎日が勤労奉仕です。近くに飛行場があったので、警戒警報が鳴ると練習機をみかん畑の中へ隠したこともたびたびありました。

戦争のために多くの人が犠牲となり、私の家の近くでも親や子どもを亡くした人が多勢います。

今の子どもたちを見ていると、つくづく幸せだなあと感じます。それと同時に、戦争という悲劇を2度と繰り返してはなりません。自分たちが経験したあのようなことは、子どもたちにさせたくないのです。

世界中から戦争をなくし、すべての人たちが平和で暮らせる、世の中であってほしいと願います。

お茶が空になっていたのです。そして、にこにこしながら「今日のお茶は、苦かったなァ」とほほ笑んでくれたのは、今でも忘れられない体験です。

何でも話せる親友を

稲岡里美さん
(21歳 原田)

東京でひとり暮らしの大学生活。全く知らない土地で、全く生活環境も異なり、入学当時はこれからの4年間のことを考えると、ただ心細

なすすべを知らず、夕食の献立に悩み、夜はテレビやラジオで寂しさをまぎらわす。そんな毎日を送っていた私も、4月からは早くも4年生です。ようやく慣れたころには卒業のことを考えています。大げさですが生きるも死ぬも自分自身にかかっているようで、毎日懸命に生活してきたおかげで、お金や時間の使い方、料理や家事など、次第に上手になってきたようです。気を張っていれば病気も寄りつかない、何でも話せる親友を1人でもいいからつくると、とても心強いものです。

初めて口にした "生ジラス"

あの街



わが街



稲葉美枝子さん (28歳)
富士見台5丁目

プロフィール

千葉県柏市出身。ご主人の光雄さん(29歳)とは東京の会社へ勤めていたときに知りあい職場結婚。富士市へは昭和57年1月に。家族は長男の純一君(1歳半)との3人家族。旅行が趣味という明るい若奥さん。

柏市は、人口約二十五万人で、東京のベッドタウンとして急速に人口が増えたまちです。私が子どものころは、何もなかったころでしたが、いまでは駅前もきれいになってすっかり変わりましたね。富士市のことは、富士山とニュースで知った田子の浦港のヘトロくらいでした。雇用促進住宅に住んでいます。暖かいし生活しやすいですね。公営住宅もたくさんあるし、家賃も安いのでたすかります。子どもの検診では転入してきたばかりで地理も不案内のとき、近くの公民館で受診できましたので感謝しています。食べ物では、初めて口にした生ジラス、ゆでジラスの味が忘れられません。子どもも喜んで食べています。柏市にはありませんから、両親への土産はいつもジラスです。地域の人は、同年輩の家庭が多いし、毎月の草とり清掃などで顔見知りになり、気軽におつきあいさせてもらっています。すばらしいところですね。